言外の意味から見たコミュニケーション

山本英一（関西大学）

1 言外の意味（コノテーションと推意）

一口に言外の意味と言っても、そこには色々なタイプの意味が含まれるのが実情である。例えば、次の例が示すように、don't aske me というフレーズには、話し手の「戸惑い」や「驚き」の気持ちが込められている。

(1) You reply 'don't ask me' when you do not know the answer to the question, usually when you *are annoyed* or *surprised* that you have been asked. (COBUILD 1995)

特定の語句を使用することで必ず喚起される、このような感情や連想は、〈コノテーション〉と呼ばれる言外の意味である。

一方、ある発話を聞いた時、聞き手が推論を行なって理解する意味がある。一般に、〈推意〉と呼ばれているものである。例えば、接続詞 but の使用は、聞き手に推論を促し、(2) a. からは (2) b. のような〈推意〉が得られると言う。

(2) a. She was cursed with a stammer, unmarried but far from stupid.
b. Unmarried people (or people who stammer) are stupid.

また、(3) a. から推論可能な (3) b. も〈推意〉の一つである。

(3) a. (When asked why she didn't eat her school dinner, she replied) It's the taste.
b. The taste is not good.

〈コノテーション〉と〈推意〉の違いは、発話理解に聞き手の推論が関与しているか否かという点である。また、〈推意〉の中でも、文脈とは関係なく、特定の語が引き金となって生じる (2) b. のようなものを〈慣習的推意〉、文脈に依存して得られる (3) b. のようなものを〈会話の推意〉と呼んで、両者を区別することがある。

(4) 推論を伴わない・・・〈コノテーション〉(1)
推論を伴う・・・・・〈推意〉→ 文脈に依存しない・・・〈慣習的推意〉(2) b.
→ 文脈に依存する・・・・〈会話の推意〉(3) b.

実際のコミュニケーションでは、字面の意味だけではなく、発話の背後に隠れている、話者の意図や感情を的確に捉えることが頻繁に要求される。その意味において、〈コノテーション〉や〈推意〉といった概念は重要で、特に実際の場面に依存している〈推意〉が理解できなければ、結局コミュニケーションは成立していないに等しいのである。

2 推意と関連性理論

Sperber and Wilson (1986) の「関連性理論」によると、発話の価値は、その理解にかかる〈労力〉と、そこから得られる情報量、すなわち〈報酬〉との相対的比較の中から決定される。次の (5) a. は (5) b. よりも〈労力〉がかかるが、そこから引き出される一連の

〈推意〉（=(6) a. ～ c.）が〈報酬〉と見なされるので、関連性の高い発話と判定される。

(5) Does Susan drink whisky?
a. She doesn't drink alcohol. b. No, she doesn't.

(6) a. Whisky is alcoholic. b. Gin (Sherry, Beer, etc.) is also alcoholic.
c. Susan doesn't drink whisky (gin, sherry, beer, etc.).

(2) b.、(3) b.、(6) a. ～ c. は、いずれも命題形式をとる〈推意〉である。しかし、日常の発話には、命題の形には馴染まないが、別のやり方で円滑なコミュニケーションを保証している〈推意〉も含まれている。

(7) A: It's a lovely day for a picnic.
(They go for a picnic and a few hours later it suddenly begins to pour.)
B: *It's a lovely day for a pinic, indeed.*

(8) (The speaker is speaking on the assumption that the addressee knows he's a doctor.)
Fiction is by far the best *vaccine* against reality.

(7) の B の発話は、数時間前の A の発話を繰り返しただけである。しかし、そこからは、A の言葉が全くの見当はずれであったという非難の気持ちが〈推意〉として伝わってくる。一方、(8) は、vaccine という語を使用することにより、話し手が聞き手と共有している情報の確認を意図しているとの〈推意〉が伝わるのである。つまり、〈推意〉には、話し手が暗に表明を試みている態度や意図も含まれ、これらは基本的に非命題的意味である。

(9)
推意 → 命題的側面・・・・・・新しい内容の付加
推意 → 非命題的側面・・・・・話者の意図・態度の確認

言外の意味からコミュニケーションを眺める場合、この二つの側面が、どのような形で絡み合っているかを見きわめ、順序立てて解きほぐしていく作業が必要である。

参考文献

Blakemore, D. (1992). *Understanding Utterances: An Introduction to Pragmatics.* Oxford: Blackwell Publishers.

Grice, H. P. (1975). Logic and conversation. In Cole and Morgan (eds.) *Syntax and Semantics 3.* New York: Academic Press. 41-58.

Levinson, S. (1983). *Pragmatics.* Cambridge: Cambridge University Press.

Sperber, D and D. Wilson (1986) *Relevance: Communication and Cognition.* Oxford: Basil Blackwell.

Sperber, D and D. Wilson (1991) Loose talk. In Davis (ed.) *Pragmatics:A Reader.* New York: Oxford University Press. 540-49.

Thomas, J. (1995). *Meaning in Interaction: An Introduction to Pragmatics.* London and New York: Longman.

Wilson, D. and D. Sperber (1986) Inference and implicature. In Travis, C. (ed.) *Meaning and Interpretation.* Oxford: Basil Blackwell. 45-75.

Yamamoto, E. (1997) On interpretive use of language. In The JASEC Bulletin, vol. 6. 1-10.